

～つくばみらいの魅力、発信します！～

高岡流綱火

～夏の夜を彩る迫力の火祭～

市では、市民協働のまちづくりを推進するため、市の魅力などを市民目線で発信してもらう、市民特派員とともに、広報紙の取材・編集を行っています。

今回は、「高岡流綱火」をご紹介します。



市民特派員
やまだあき
山田亜希さん

噴き出す炎、舞い散る火花

火難と病難除け・家内安全・五穀豊穡を祈願する「高岡流綱火」が8月23日、高岡の愛宕神社に奉納されました。

高岡流の綱火の起こりは、江戸時代初頭とされており、鎮守の祭りの時に大樹から赤と黒の蜘蛛が舞い降り、巣を作るさまから村人が創作したと伝えられています。火薬の配合や技術などは秘宝とされ、現在は「高岡流綱火更進団」が伝統を守り続けています。この高岡流綱火は昭和51年に、「小張松下流綱火」と共に国の重要無形民俗文化財に指定されています。

高岡流綱火は「くりこみ」という行事ではじまります。山車を引いた氏子の皆さんが、愛宕神社境内に到着し社を取り囲むと、持っていた手製の火花を一斉に社に向け、噴き出す火花を浴びせかけます。これによって社は燃えんばかりの火の粉に包まれ、清められるといわれます（写真⑤）。

家族で訪れていた中澤章子さん（狸穴）は「子どものころから毎年来ている。家族ができ、今度は子ども達と一緒に毎年来るのが楽しみ」と笑顔で話してくれました。くりこみの後、神社にお参りすると「願い事が叶う」と教えていただいたのでお参りしました。

「くりこみ」が終わると、余興としていよいよ綱火が始まります。この日は「二六三番叟」にはじまり「高岡丸の舟遊び」、そしておおよそ10年ぶりという「自衛隊の大演習」（写真⑥）の演目が披露されました。空中に張られた綱のみでからくり人形をあやつる伝統の技と、タイミングを合わせて噴き出す仕掛け花火の見事な競演に、集まった皆さんは感嘆の声をあげていました。

まちが大切にす伝統文化、人が大切にす神事。永きに渡り世代をまたぎ続いた伝統文化を、継承し続けることが大切だと思いました。

